

大東亜戦争・太平洋戦争はいかに語られてきたか

作家 保 阪 正 康

ご紹介を頂きました保阪と申します。私の基本的姿勢は、人は生きる時代を選べない以上、その時代の枠組みの中で生きざるをえないということです。

ガダルカナルで亡くなつた日本兵のことを調べにアメリカに行つたんですが、アメリカに膨大な写真や記録が残つていて、その写真を見ると

旭川の第二八連隊の兵士達が折り重なるようにガダルカナルで亡くなつてゐるんです。皆近在の農村の青年です。何も分からずに一所懸命戦つて亡くなつたわけです。そういう人たちの死を犬死だとか、あるいは無駄な死というような言葉で言つて良いのだろうかというようなことが、常に頭にあります。その彼らもまた何かを訴えている訳ですから、それを汲み取ることが大事ではないかなという気がします。

それともうひとつ、私が医学に興味を持つてゐるのも昭和の軍事の延長なんですねけれど、医療と軍事というのは表裏の関係でかなり共通点があるんです。そういう視点というのも、軍事を見るときの一つの広がりかなという感じがいたします。

今日の話は、大東亜戦争、太平洋戦争ですね。いわゆる戦後、昭和二〇年八月以後と申しましようか、それはどう呼ばれてきたか、その呼称がどういうふうに語られてきたか。それを通じて、この国は何かを見落としたり、あるいは何かをそこで発見したり、あるいは何かを作つてゐるんだと思います。

私が、大東亜戦争、太平洋戦争という呼称に注目しているのは、ここから色んな問題がでて来るからです。単純に言うとあの戦争の目的は何であつたのかという戦争の目的が、当時の政策決定者の意思を越えて歴史的な意味を持つてゐるんだろうと考えます。それから、大東亜戦争、太平洋戦争という呼称の中に、戦場の問題も出てくると思います。戦場を限定する意味で使うのか、あるいは戦場そのものを越えた例えれば太平洋戦争というのは日中戦争、支那事変からの延長として捉えるということがあれば太平洋戦争の意味が全くかわってきます。

この問題を突き詰めていくと、結局はあの戦争は何であったのかといふことになるわけです。大東亜戦争、太平洋戦争あるいは最近に至ると

アジア・太平洋戦争とか、あるいは一五年戦争とか、色んな呼称が使われるようになりますが、何故このように戦争といふものの呼称でも一貫したあるルールというものを作れないのだろうか。それを、戦後のバッカグランドで考えてみたいと思います。

始めに、戦後五〇年というのは私たちの国の言論あるいはものの考え方というか、大東亜戦争、太平洋戦争のどれを取るかという、その呼称の背景にあるものの考え方についていくつかの特徴があると考えています。私なりの立論をしますと、戦後の言論は顕教化しています。顕教化する言論と密教化している言論というのが出来上がっています。

顕教化している言論というのは何かというと、平和と叫べば平和団体となるようなおかしな現象があるように、いわゆる日本の世論を形成するメディアの言論、一般的に認知され、商品化されている言論ということが言えると思います。これを顕教化した言論と仮に定義します。

しかし顕教化した言論といふものは極めて曖昧になるので何か軸が必要でしょう。例えば『朝日新聞』の昭和二〇年八月一五日から昨年八月一五日までの社説を一つの軸に据えてみます。『朝日新聞』社説が、いわゆる顕教化した言論の先導役を果たしているという事が事実だと思いります。『朝日新聞』と対峙するものあるいは意図的に追随するもの等、色々な形があります。それを八月一五日の社説に限定して軸のひとつとして読んでいくと、幾つかの特徴があります。それを、顕教化している言論、建前としてのこの社会の言論といふものであろうと見ることができます。

その社説の中で顕教化した言論の軸が成り立っているという仮定で話を進めますと、いくつかの特徴を大まかに次の三点に絞り込むことができます。先ず、あの時代は悪かった、あの時代というものが徹底して批判されるべき対象であるということ。もう一つは、私たちの国が憲法によって、戦争が負けたことによって始まつた新しい時代、新時代といいましょうか、そういう新しい時代だという強い認識です。新しい価値観のもとで始まつた時代であるということです。三番目に、結局個人は自覚しなければいけない、個人は自立せよ、個人はその新しい時代の認識で生きる、その強さを持てと言うのが繰り返し語られている。この三つです。

この言論が成り立つている背景というものは、良く吟味すると昭和二〇年の九月から昭和二一年の四月二八日の占領期の初期段階、つまりGHQが入つて来て最初に日本に対して行つた民主化政策いわゆる非軍事化政策が拠り所になつていて分かれます。この期間にGHQが持ち込んだイデオロギー、あるいは戦勝国である彼等に背かないというか対抗するような力を持たせないという意味の非軍事化政策とこの理念を我々の国へ注入するという徹底した政策が行われたわけです。

顕教化した言論の特徴をもう一つあげます。『朝日新聞』の社説がその商品化された言論の典型をなしているのですが、その社説をよく読むと、我々は民族主義といふものを少し軽視しているのではないか。戦後の民主主義といふものは、あの時代の民族主義であつてはいけない。地球人としてのとか、地球人はという主語に置き換えられてゆき、そういう

う意味のナショナリズムが必要ではないかということを言いだします。

『朝日新聞』社説が五〇何年示しているものが顕教化した言論と見ていくと古典初期の理念に基づいていて、しかも、それを吹つ切れてないでいるということが一つの前提として出てくるのです。『朝日新聞』の社説を中心に据えようとしますと、極端な論というのが当然あるわけで、例えば呼称の問題でいえば支那事変、日中戦争という領域を越えて対中国侵略戦争と言えといふ人もいるわけです。あるいは大死なんだという論が出てくる。

それで顕教化した言論のささやかな抵抗というか、密教化していくところの境目にある言論といふものは、あの時代は確かに批判されるべきところはあるが、あの時代は何かやはり我々の民族あるいは国民が継承すべき、あるいは顕彰すべきことがあるということです。

一方、密教化した言論といふものがあります。私は、なかなか商品化されない言論だと思いますし、認知度の低い言論だと理解しますが、実

はある意味で本音の部分です。奥野大臣の発言で、『祭六〇会々報』というインパール作戦に従軍した第一五軍の戦友会の新聞からとったものが分かり易いと思つてコピーしました。奥野大臣は、顕教化した言論に叩かれて更迭になつたのです。密教化した言論の一つの形はここに現れているのです。それは、我々の国の戦争は侵略かといふ問題ではなくいわゆる防衛戦争であり自衛戦争である。と同時に、あの戦争によつて東亜の解放がどのような形かは別にして進んだではないか、我々は何も侵略する意思があつたわけではない、というような論です。

昭和二〇年八月一五日までにその社会、歴史を形作つて世論といふ意見、考え方があるが、日本の社会の底辺に厳然としてあるわけです。それが浮上するときがいわゆる奥野発言だったのです。こういつたのを密教化した言論と私は言うのですが、大東亜戦争、太平洋戦争という呼称 자체もこの密教化の中に分けられた形で使われているのが現在まで来ているのではないか。

軍部あるいは東條内閣がどのような認識での戦争を行つたのか、その戦争についてどのような呼称を選択したかということは、情報局が一二月一〇日に発表した文書にあります。大東亜戦争と呼称するということです。支那事変を含めて大東亜戦争と呼称するには、大東亜新秩序建設を目的とする戦争であることを意味するものだつたわけです。ここには、自存自衛という言葉はないのですが、自存自衛という言葉は別のところで内閣声明ではつきりでているのです。

少なくとも大東亜戦争といふものを呼称した時には、大東亜共栄圏を確立するというような意味があることが、この発表でも明らかになつています。昭和一六年一二月一〇日の戦争の呼称に関する会議については、藤村先生の「昭和大戦といふ呼称の提案」(『軍事史学』第三三一卷第三号)にも書かれています。やはり当時の戦争指導を担つた側の考えがあります。更にそれを補完して陸軍省が一七年の三月に陸軍省報道部編『大東亜戦争』を出しています。どういう意味をもつて我々は戦うのかといふことが、この中で執拗に繰り返し語られています。

戦争指導に当たつた陸軍としては、大東亜戦争は新東亜戦争である、

あるいは新世界戦争と言つても良い。東亞における現状維持体制が破壊され新秩序が生まれても、歐州における現状維持勢力が存在するにおいては世界恒久平和は望み得ない。これは、ドイツと一体になつて新世界戦争というものを起こすという意味を持つてゐるということなのです。

更に、当時のジャーナリストが、『朝日新聞』の記者ですが、「世界最終の大戦争。戦争絶滅のための大戦争」と書いています。本当を言うと、この東亞戦争は東亞を解放するとか言うけれども基本的にはこれは止むに止まれぬ自衛の戦争であると、先程の陸軍省の資料では冒頭の方に明確に書いてあります。さらに自衛権の発動であると同時にまた大東亞圏内における諸民族の解放戦争であるというふうに言つています。一七年三月の段階ですから、緒戦の戦果が上がつてゐるため、政策指導に当たつた中堅の幕僚あるいは政治指導者達は、自存自衛の戦争というものが本質であるが、歴史的意味を持たせるために解放戦争であるというようなことを被らせてきました。そして、昭和一七年の一月、二月、三月になると、こういう考え方が明確に出て来ます。戦後、顕教化した言論のなかで、こういつた考えを密教化の部分へ追い込んでいくことになります。

兵士たちはやはり、何か歴史的な意義を持つてガダルカナルで死んでいつてゐるわけですから、私たちはそれを汲み取るという側に立とうと思うのです。その時に、この戦時指導者の理念は少なくとも全部肯定はしないけれども、ある程度一定の範囲で認めようと思ひます。しかしそれは、顕教化した言論の中では恐ろしいほど封印されている言論である

ということを意識することが必要であると思ひます。

顕教化した言論といふのはどういう形でこの五〇年成り立つていただろうか。大東亞戦争という言葉が使わると同時に、顕教化した言論の中でその太平洋戦争という言葉がある意味の階段を上がるよう上去っていく。一五年戦争という言葉になる。今はアジア・太平洋戦争となる。あるいはアジアへの侵略戦争だという言葉が出てくる。太平洋戦争という語が常にそれだけでは物足りないという認識が拡大してゆくわけです。それが、日本の戦争呼称の一つの現象として言えると思います。顕教化した中で使つてゐる言論といふのは、GHQの初期の占領政策を基盤としているのではないか。本来ここに大きな誤りといふか基本的な錯誤が二つあると私は感じるのです。一つは、ナショナリズムというものに対する視点がない。もう一つは、性善説で、進歩するんだという考え方です。昨日よりは今日、今日よりは明日が進歩している。非ナショナリズムと人間性善説とでも言いましょうか、これが戦後顕教化した言論の両輪になつていつた。これが重要なことだらうと思ひます。

しかし、その論理というのは浮遊してゐるわけです。立脚点もなければ着地点も曖昧です。つまり、主語は、自分は、お前は何の存在かといふときに、人間はとか人類はとかしか言えない。この非ナショナリズムといふものは、戦後のGHQが生み出した先程の政策の中で必然的に作られるものであつたわけです。

私はこれが戦後五〇年あまり続いている、その根幹を支えているのは、やはり憲法にあると思ひます。憲法を改正しろとか改正するなどとを論

じるのではなく、憲法が実体的にこの戦後顕教化した言論を支え、制度的に保証してきた。憲法は日本のナショナリズムについて驚くほど触れていないというか、非ナショナリズムです。しかし、あの時の憲法といふものは、昭和初期のGHQの占領政策と実は対になつていて、戦争の悲惨さ、残酷さ、非人間さ、これらは日本の問題のみではなく戦争そのものが抱え込むことがあります、それと鏡になつていて。その鏡になつているから昭和二〇年の九月、一〇月、二一年にはまだ遡及力があると思います。その鏡の役割でその戦後言論の顕教化した部分がスタートしています。戦後言論の顕教化した部分の鏡であるあの戦争が悲惨だということ、そして戦後憲法に手を触れるということに極端にヒステリーになる人達というのは必ず、戦争危機が近づいている、あるいは戦争のファシズムの態勢に入つたというような言葉を使います。それは鏡が役割を終えて鏡として反射していなければ、それを言わなければ彼らは自立してゆけないわけです。自立してゆけないことが戦後言論の顕教化した特徴の一つなんですね。これは個人の信条の問題で個人がそつあるべきだというものは極めて結構ですが、その論を平氣で吐けるという神経の中に何か退廃が生まれるわけです。

それは、戦後一貫して成り立つている非武装中立論というものを見れば良く分かります。昭和二〇年代から言われている戸締まり論というのがあります。この戸締まり論が非武装中立、憲法を守るという人達の間ではしばしば引用されます。昭和五〇年代の中頃でしたか、社会党の石橋委員長が『非武装中立論』という本を書きまして私はそれを見て驚き

ました。そこでは、戸締まり論というものを徹底的に批判する。私たちは攻められないような国にすればよいのではないか。話せばわかるんだ、相手を説得すれば分かるんだというのです。これは個人の生き方の信条の問題を国家の姿勢に替える極めて乱暴な論なんです。このことがやはり、人間性善説というか性善論というので戦後の言論を支えてきた。

社会主義というものは、理論は別にして現実はどうであつたか。社会主义の方が酷い現実を生んでいたと私は思います。顕教化した言論の着地点、立脚点がなく浮遊しているわけで足場がないわけですから、それは社会主義の幻想によって支えられていた。極めて良く分かることは一九九〇年頃に相次いで社会主義が倒れたときに、私は今世紀の誤りは今世紀中にケリを付けるべきだというふうに思う歴史の意思が働いているのだと思いますが、崩壊したというよりも社会主義自身が自分たちが訴えていた理念、綺麗ごとと言いましょうか、その理念と現実の遊離が甚だしく辻褄が合わなくなるほど酷くなつた。つまり、彼らは社会主義という言葉で生み出している現実が、彼ら自身にも耐えられないほど酷い現実になつていて。そういうような社会的な現象の中で日本でも立脚点がなくなつてきた。そして浮遊していたその論も着地点が見いだせなくなつてきた。

そこで何を言っているかというと、一つの仕方は地球、つまり主語は全地球人、全人類ですから、それは環境問題ですね。環境問題に逃げて、社会主義の立脚点を捗そうとしている。明らかに社会主義が崩壊

した後、彼らの戦争に対する認識における正義の尺度がなくなつたわけです。社会主義の方がファシズムではないか。例えば、一九三九年の独ソの不可侵条約でポーランドに対してやることはドッチモドッチではないか。そういうようなことがもう現実に歴史の中にボロボロ出てきているわけです。そういう中で、立脚点も着地点も失つてしまつた。戦後日本の顕教化した言論が一息ついたのが「従軍慰安婦」問題であり、それから戦争責任を個人レベルに落とすという際限のないひとつの自己回転です。こういう言葉を使うのは不謹慎かも知れませんが、社会病理学的な問題にまで入り込んでいると私は思います。それは何故かというと、戦後言論が必然的に背負い込む宿命でした。それは立脚点も着地点もな浮遊しているわけですから、その浮遊した理論というのが際限なく浮遊してゆけば、タマネギの皮を捲るように最後は社会病理学的な現象になる。しばしば、「従軍慰安婦」を批判される方の著作を読むと完全に社会病理学的現象に入っていると思います。認識そのものがむしろこれは歴史の解釈ではないという感じがします。それが一つの言論の枠組み、戦後日本の言論を支えてきた枠組みとして現実にそういう姿を生んできているということを認識する必要があると思います。

その枠組みが、私たち自身が情けないんですけれども、私たちの国はそういう言論の顕教化と密教化で、太平洋戦争と大東亜戦争という言葉に象徴されるように、顕教化の中では太平洋戦争という言葉を使い、その場合も少なくともアジアには侵略した、しかしヨーロッパには何の侵略もしていないというそのような使い方です。つまり、完全に密教化し

た言論の中での大東亜戦争という言葉が、顕教化した中では入っていない。正直言つて、私は太平洋戦争という言葉で習つた世代でありその言葉を全面的に受け入れてきた世代ですが、それは必ずしも歴史を継承することにはならないと気づいて、興味を持つて歴史を調べて、そうではないのではないかと思つたのです。

つまり私たちは、戦後の言論を、顕教化した言論から一貫して失われているナショナリズムというものをもう一度軸に据えて見なければなりません。私はナショナリズムを軸に据えて太平洋戦争論というものをキチツと語るべきだと思います。ただ、それはなかなか語れないのです。語るだけの私たちの能力の問題もあるし、時代の中でそういうものを見いだせないということもあるでしょうけれども。これは何も、歴史はこの時代に終わるわけではありませんから、五〇年、一〇〇年というサイクルで動くわけですから、次の世代へバトンタッチしてゆくというようなことが、戦争の世代の役割としてあるという認識を私は持つてているのです。太平洋・大東亜戦争というふうに言おうと。

さし当たり、そういう世代の枠の中でそういうふうに呼ばうと決めているということを認識する必要があると思います。

ますけれど、それは顕教化した言論と密教化した言論の境目のなかで失われていて、今日日本人が発想の基盤にナショナリズムを全面肯定せよという意味では全くなく、我々は何故存在しているかということを含めてナショナリズムを踏まえた上で、戦争というものを理解してゆかねばならないのではないかという気がするわけです。

もうひとつ、占領初期太平洋戦争という言葉が使われるようになつた

のは、直接的にはアメリカの指導、あるいは強制力のある指導です。「太平洋戦争全史」というタイトルで日本の全部の新聞に一二月八日から掲載されます。しかしこれが基本的な東京裁判のことと照らし合わせて読むと、検事側の認識と繋がります。実は、先程述べた顕教化した言論の太平洋戦争を支える論理というのも、ここから殆ど出ているのです。そういう意味で言うと、太平洋戦争という言葉 자체が持つていて意味というのは、この一二月八日のG H Qが一斉に掲載させた、このことが今にも続いていることなんだと思います。一二月半ばになりますが、G H Qは教育政策に色々口を挟んできて、武道の禁止あるいは精神的な修身の廃止とか色々手を打ってきます。その中で、不要なあるいは余り使つてはならない用語の中に大東亜戦争が出てくる。大東亜戦争という言葉は、やはり日本人の中で少なくとも占領期には使つてはいけないという意味をその時持たせたのではないでしようか。それはどういう戦争だったのかということ、これがアメリカ側のG H Qの占領政策の発端だつたと思います。

私たちは先ほど言ったように、顕教化した言論というものは殆どこれを肯定する形で進んできたわけですから、このことについてもう一度そなへたのが社会主義の幻想が壊れその邇及力を失つたと同じように、密教化した言論の中にもすでに邇及力を失つた部分はあります。密教化した言論が顕教化した言論の中に入り込めないというようなのは、実はその密教化した側で認識にやはり弱さがあるという

ことです。その弱さを突き詰めていくとあの戦争の時に本当に戦争目的を理解した戦争だったのかということです。これはやはり当時の日本の指導者の問題であるとともに、同時に社会の問題でもあります。

あの時代の人達のために、せめて私たちの立場から、次の世代に対しても、歴史的な責任を担つているという気がするのです。その辺が大東亜戦争、太平洋戦争という言葉だけで、侵略だいや解放だという論の以前に踏まえるべきものがあるのではないかという気がします。何年か経つと、少なくとも私たちの国が大東亜戦争という主体的意思を持つて戦つた戦争であるなら、それはその当時の戦時指導者と全く違う認識で大東亜戦争というものを歴史の中に位置づけることができるのではないでしょか。

どうしてもあの戦争が納得できないという面も私なりにあるのです。軍人・指導者たちの責任というものは、勝つか負けるかというのが重要です。しかし、その勝つか負けるかとの判断が戦争の判断に繋がつてしまつた。それは何故軍事と政治がバランス良く動かなかつたのだろうかということを考えなければいけません。同時にこれは、基本的な疑問なのですが、私はあの戦争を全く否定していませんが、昭和一九年の終わり頃から二〇年にかけての戦時指導者の中にやはりどうしても納得できないものがあります。それは、当時の戦時指導者のスタイルが殆ど意思を持たないほど状況に追随し混乱している。あなた達が戦つた九年から二〇年の戦時指導において、この国の存亡を賭けて戦うといった時には、そのあなた達が負うべき責任というのは、日本の歴史そのも

のに負わなければならぬのです。時代の指導者としての責任、歴史的な責任ということを当時の指導者は自覺すべきだった。その自覺が私は歴史的にどうも納得ができないという気がします。

結論になりますが、顕教化した言論というものが、ある時代、これは私を含め、ある人が生きた時代をずっと支配してゆきますが、その時代の中では、どこかやはりオカシイんだと思つてゐる人達がいるということのメッセージを次の時代に伝えていくことが重要です。顕教化した言論の中で使われている太平洋戦争という認識だけは、一度崩壊させなければならぬという気がします。それが結論ということになるのかなと思います。

(平成十年七月一日の戦史研究発表会における講演の抄録である。

文責・千田 収

◎講師紹介◎

昭和一四年一二月、北海道に生まれる。同志社大学文学部卒業。ノンフィクション作家、ジャーナリスト。日本近現代史、現代医療の分野で精力的な執筆活動を続けている。

【著書】『東條英機とその時代』(上下)、『瀬島龍三 參謀の昭和史』、『秩父宮と昭和天皇』、『日本は戦争を知つていたか』、『幻の終戦』、『父が子に語る昭和史』など多数。